

古文の特徴と古文単語

# 古文の読解

# 歴史的仮名遣い

古文でつかわれる仮名遣いは**歴史的仮名遣い**という。現代仮名遣いに直すときには、ルールに従って直そう。

## 古文 歴史的仮名遣い

		直し方	例
①	語の途中や最後の 「は・ひ・ふ・へ・ほ」	「わ・い・う・え・お」に 置き換える	「あはれ」→「あわれ」 「とふ」→「とう」
②	「ぢ・づ」	「じ・ず」に 置き換える	「なんぢ」→「なんじ」 「いづれ」→「いずれ」
③	「ゐ・ゑ・を」	「い・え・お」に 置き換える	「くれなゐ」→「くれない」 「をかし」→「おかし」
④	「くわ・ぐわ」	「か・が」に置き換える	「くわじ」→「かじ」 「さんぐわつ」→「さんがつ」
⑤	「-au」	「-ou」に置き換える	「まうす」→「もうす」 (mausu→mousu)
⑥	「-iu」	「-yuu」に置き換える	「あやしう」→「あやしゅう」 (ayas <u>iu</u> →ayas <u>yuu</u> )
⑦	「-eu」,「-ehu」	「-you」に置き換える	「けふ」→「きょう」 (ke <u>hu</u> →k <u>y</u> ou)
⑧	助動詞・助詞「む」	「む」を「ん」に置き換える	「申さむ」→「申さん」

① あはれ → \_\_\_\_\_

② おほかた → \_\_\_\_\_

③ あぢ → \_\_\_\_\_

④ こゑ → \_\_\_\_\_

⑤ けふ → \_\_\_\_\_

⑥ かをり → \_\_\_\_\_

⑦ はづれ → \_\_\_\_\_

⑧ ゐど → \_\_\_\_\_

⑨ くわじ → \_\_\_\_\_

⑩ いみじう → \_\_\_\_\_

① まうす → \_\_\_\_\_

② わらふ → \_\_\_\_\_

③ さやうの → \_\_\_\_\_

④ ゆゑ → \_\_\_\_\_

⑤ たがひに → \_\_\_\_\_

⑥ いはく → \_\_\_\_\_

⑦ かやう → \_\_\_\_\_

⑧ ゐたりける → \_\_\_\_\_

⑨ まうでて → \_\_\_\_\_

⑩ ぐわんたん → \_\_\_\_\_

① ちとう → \_\_\_\_\_

② すくなう → \_\_\_\_\_

③ ふるふ → \_\_\_\_\_

④ たまう → \_\_\_\_\_

⑤ いとほし → \_\_\_\_\_

⑥ くらうど → \_\_\_\_\_

⑦ いたはし → \_\_\_\_\_

⑧ かなへたく → \_\_\_\_\_

⑨ やむごとなし → \_\_\_\_\_

⑩ あらがふ → \_\_\_\_\_

① かほ → \_\_\_\_\_

② ゐなか → \_\_\_\_\_

③ をかし → \_\_\_\_\_

④ ぢめん → \_\_\_\_\_

⑤ なほ → \_\_\_\_\_

⑥ あふぎ → \_\_\_\_\_

⑦ やうやう → \_\_\_\_\_

⑧ さんぐわつ → \_\_\_\_\_

⑨ せうと → \_\_\_\_\_

⑩ いうげん → \_\_\_\_\_

## 2 古文読解のポイント

### ①古文は省略が多い

古文を読んでいて内容がわからなくなる原因の一つが、古文は省略が多いことである。

#### ○「主語」の省略について

古文では、**人名や登場人物を示す言葉**は、最初に書かれた後は省略して書かれない場合が多い。

文を読んでも述語の主語が書かれていないため、誰が何をしているのか分かりづらくなってしまう。

古文で人名や人を示す言葉がでてきたら、○で囲もう。

### 主語をとらえるポイント

- ①その文章の登場人物をすべて把握する
- ②動詞から、どの人物の動作が見当をつける
- ③文章の流れから、動作主と動作の組み合わせを確認する。
- ④敬語が使われている場合は敬意の対象をチェックして、登場人物の身分の違いを確認する

謙讓語

尊敬語

一般動詞	謙讓語	現代語訳
受く・聞く	承（うけたまは）る	お聞きする
仕ふ・す	仕うまつる	お仕えする （何かを）して差し上げる
居（を）り・あり・	侍（はべ）り・候（さぶら）ふ	おそばに控える
行く・来	罷（まか）る・罷づ	おいとまする
与ふ	参（まゐ）らず	差し上げる
行く・来・	参（まゐ）る	（何か）をして差し上げる
与ふ	参（まゐ）る	参詣する
受く	給（たま）はる	参上する
与ふ	奉（たてまつ）る	伺う
食ふ・飲む	参る	参上する
着る・乗る・	奉（たてまつ）る	参詣する
食ふ・飲む	参る	参詣する
与ふ	給ふ・給はす・たぶ	参詣する
飲む	召す	参詣する
知る・治む	しろしめす	参詣する
見る	ご覧す	参詣する
聞く・食ふ・	聞こす・聞こし召す	参詣する
思ふ	思（おぼ）す・思し召す	参詣する
言ふ	仰（おほ）す・のたまふ・のたまはす	参詣する
行く・来	おはします・いまそかり	参詣する
あり・居り・	おはす・います・	参詣する
寝（ぬ）	大殿籠る	参詣する

一般動詞	尊敬語	現代語訳
受く	給（たま）はる	参詣する
与ふ	奉（たてまつ）る	参詣する
食ふ・飲む	参る	参詣する
着る・乗る・	奉（たてまつ）る	参詣する
食ふ・飲む	参る	参詣する
与ふ	給ふ・給はす・たぶ	参詣する
飲む	召す	参詣する
知る・治む	しろしめす	参詣する
見る	ご覧す	参詣する
聞く・食ふ・	聞こす・聞こし召す	参詣する
思ふ	思（おぼ）す・思し召す	参詣する
言ふ	仰（おほ）す・のたまふ・のたまはす	参詣する
行く・来	おはします・いまそかり	参詣する
あり・居り・	おはす・います・	参詣する
寝（ぬ）	大殿籠る	参詣する

○「助詞」の省略にも注意

そもそも「助詞」とは何か？

例 ・私は、学校で国語を勉強します。

例文の中の赤字で表した「は」「で」「を」の箇所が、助詞。

もし、この例文で助詞が無かったら、

・私、学校国語勉強します。

意味が全く分からないわけではないが、主語や修飾語が分かりづらい文になってしまう。

古文では、助詞が省略されていることが多い。

例 ・光源氏、笛吹きたり。 （光源氏が笛を吹いた。）

この例文に助詞を補うと・・・

・光源氏が、笛を吹きたり。

## ②話の教訓やオチを読み取る

高校入試などに出題される古文には、教訓やオチがある場合が多い。その教訓やオチをきちんと読み取れているかを問う問題がよく出題される。

教訓の例として、

「他人には親切にした方がよい」「欲張ってはいけない」「ズルをせず、努力することが大切である」など。

例

一休さんが橋を渡ろうとしたら「この橋渡るべからず」という立札が立っていたので、橋の真ん中を歩いて渡った。

「立札を見なかったのか?」と問われると、

「端(はし)ではなく、真ん中を渡ってきました。」と答えた。

このように、話の最後にオチがつくものがよく出題される。

### ③「や」と「か」を用いる疑問の表現

文に、「や」「か」を付け加えることで、疑問の文にすることができ  
る。

例

・昔、男ありけり。

(昔、男がいた。)

「**や**」「**か**」を付け加えると…

・昔、男ありけるや。

(昔、男がいたのだろうか。)

・昔、男ありけるか。

(昔、男がいたのだろうか。)

・昔、男やありける。

(昔、男がいたのだろうか。)

・昔、男かありける。

(昔、男がいたのだろうか。)



文末に「や」「か」が付いた疑問文は、分かりやすい。

しかし、文中に「や」「か」が付いた疑問文は分かりにくいので注意。

#### ㊦ 「いか」を用いる疑問の表現

「いか」「いかに」「いかが」「いかで」「など」、「いか」で始まることばが使われている場合は、「どう？」という意味に把握しよう。

現在でも、次のような表現が使われている。

「いかがいたしましたしょう？」「どうしましたしょう？」「

「この結末はいかに？（この結末はどうなる？）」「

例 ・大臣、いかならむ。 （大臣は、どうであろうか？）

例 ・いかでさることするぞ。

（どうして、そのようなことをするのか？）

#### ⑤ 打消しの助動詞について

○助動詞「む」について

古文では、助動詞「む」が「ん」で書かれていることが多い。  
そのことに注意して、次の文の意味を考えよう。

① ころもとなく思わん。 （

② おぼつかなきこと尋ねん。 （

「ころもとなし」は「不安だ」という意味、「おぼつかなし」は「はっきりしない」という意味。

①を「不安に思わない」

②を「はつきりしないことを尋ねない」

このように考えた人は×。

助動詞「**む(ん)**」は推量(〜だろう)・意志(〜しよう)の助動詞。

よって、

①は「不安に思うだろう」

②は「はつきりしないことを尋ねよう」

というのが正解。

「**む(ん)**」を打消しの助動詞(〜ない)と思っていると、本当の意味と逆の意味に解釈してしまうため、注意！

○助動詞「**ず**」について

ここで説明する助動詞「ず」が、打消しの助動詞(〜ない)。

**例**・雪にてあまたのふみ届かず。

「**あまた**」は「多くの」という意味、「**ふみ**」は「手紙」という意味。

よって、この例文の意味は、「雪で多くの手紙が届かない」になる。

助動詞「**ず**」について、注意するポイント！

助動詞「**ず**」が名詞にくっつくとき、「**ぬ**」に変わる(活用することです)。

例 ・ふみ届かぬ日あり。  
(手紙が届かない日がある。)

この赤字で書かれた「ぬ」はもともと「ず」だが、その後に名詞「日」がついているため、「ず」が活用して「ぬ」になっている。

○助動詞「ぬ」について

助動詞「ぬ」は完了の助動詞で「くした」という意味。

例 ・花、いみじう咲きぬ。  
(花がたいそう咲いた。)

助動詞「ぬ」で注意が必要なのは、打消しの助動詞「ず」の連体形「ぬ」との違いについてです。

例 ①花咲かぬ春

例 ②花咲きぬ春

①の「ぬ」が打消しの助動詞「ず」の連体形「ぬ」、意味は「花が咲かない春」になる。

②の「ぬ」は完了の助動詞「ぬ」、意味は「花が咲いた春」になる。

◎ここで2つの「ぬ」の見分け方を紹介しましょう。

・未然形(ズ・ナイにつく形)＋「ぬ」

↓  
打消の助動詞「ず」の連体形「ぬ」

・連用形(ケリにつく形)＋「ぬ」

↓  
完了の助動詞「ぬ」

①は「咲く」が「ズ・ナイ（咲かず・咲かない）」にくつつく形「咲か」に活用して「ぬ」にくつついている。

同様に②は「咲く」が「ケリ（咲きけり）」にくつつく形「咲き」に活用して「ぬ」にくつついている。

最後に練習問題を一つやってみよう。

「ぬ」に注意して、次の文の意味を読み取りましょう。

①ふみ届かぬ日

（

）

②ふみ届きぬ日

（

）

①は「届く」が「ズ・ナイ（届かず・届かない）」にくつつく形「届か」に活用して「ぬ」にくつついている。

よって①の意味は、「手紙が届かない日」になります。

②は「届く」が「ケリ（届きけり）」にくつつく形「届き」に活用して「ぬ」にくつついています。

よって②の意味は、「手紙が届いた日」になります。

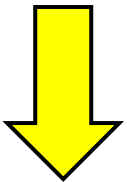
◎最後にもう一度、ポイントをまとめておくと：

- ・主語の省略が多いので、人名等は○で囲んでチェックしておく。
- ・助詞が省略されると分かりにくいので、助詞を補って読む。
- ・古文は教訓やオチがあるものが多いため、パターンをチェック。
- ・文中・文末に「や」「か」が付け加わると、疑問の文になる。
- ・「**いかが**」など、「**いか**」で始まる文は、疑問の文になる。
- ・助動詞「**む(ん)**」は打消しの助動詞ではないので、注意する。
- ・完了の助動詞「**ぬ**」と打消しの助動詞「**ず**」の連体形「**ぬ**」の違いに注意する。

・未然形(ズ・ナイにくつつく形)＋「**ぬ**」  
↓  
「くない」の意味

・連用形(ケリにくつつく形)＋「**ぬ**」  
↓  
「くた」の意味

☆以上のことを意識して、何回も問題を解こう。  
速く、正確に読むことが得点アップの近道！



古文は、全文訳ができるようになれば簡単な文章！  
完璧に読めなくても、一回本文を全部読もう！

# 練習問題③

次の『徒然草』の一節を読んで、あとの問いに答えなさい。

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ、(1) 心うく覚えて、あるとき思ひ立ちて、ただ一人、かちより、詣てけり。極楽寺・高良などを拝みて、かばかりと心得て帰りにけり。

さて、(2) かたへの人にあひて、「年ごろ思ひつること、果たしはべりぬ。聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ。そも、参りたる人ごとに山へ登りしは、なにことかありけん、ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。」とぞ言ひける。

少しのことにも、(3) 先達はあらまほしきことなり。 (『徒然草』第五十二段)

\*心うく 残念に思われて \*かちより 徒歩で \*ゆかしかりしかど 気になったが

## 【現代語訳】

一、傍線(1)の主語を一単語で答えなさい。

( )

二、傍線(2)かたへの人の意味として、最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 通りすがりの人 イ 高良の人 ウ 仲間の人

( )

三、この話の面白さを説明した次の文章の( )にあてはまる言葉を本文より書き抜きなさい。

(ア)を(イ)と思い込み、(イ)の本殿がある(ウ)を見ずに帰った。

ア ( ) イ ( ) ウ ( )

## 練習問題④

次の『枕草子』の一節を読んで、あとの問いに答えなさい。

(1) うつくしきもの。瓜にかきたるちこの顔。すずめの子の、(2) ねず鳴きするに躍り来る。二つ三つばかりなるちこの、急ぎてはひ来る道に、いと小さきちりのありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなるおよびにとらへて、(3) 大人ごとに見せたる、いとうつくし。頭は尼そぎなるちこの、目に髪の毛の覆へるを、かきはやらで、うちかたぶきて物など見たるも、うつくし。(清少納言『枕草子』第四百十五段)

### 【現代語訳】

一。傍線(1) うつくしきの意味を書きなさい。

( ) ( )

二、(2) ねず鳴きするに躍り来るついて、(ア)「ねず鳴きする」の主語と(イ)「躍り来る」の主語をそれぞれかきなさい。

(ア) ( ) (イ) ( )

三、傍線(3) 大人ごとに見せたるについて、誰が何を見せたのか、文中の言葉を抜き出し、( )の「中」に書きなさい。

( ) (が) ( ) を見せた。

# 練習問題⑤

次の『古今著聞集』の一節を読んで、あとの問いに答えなさい。

醍醐の大僧正実賢、もちをやきて(1)くひけるに、(2)きはめたるねぶりの人にて、もちを持ちながら、ふたふたとねぶりけるに、まへに江次郎といふ恪勤者のありけるが、僧正のねぶりでうなづくを、われにこのもちくへと(3)気色あるぞと心得て、走りよりて手に持ちたるもちをとりてくひてけり。僧正おどろきてのち、ここに持ちたりつるもちとはたづねられければ、江次郎、そのもちは、はやくへと候ひつれば、たべ候ひぬとこたへけり。僧正、比興のことなりとて、諸人に(4)語りてわらひけるとぞ。

\*醍醐 醍醐寺 \*きはめたるねぶりの人たちどこに居眠りを始め

てしまう人

\*ふたふたとうとうと \*恪勤者 僧正の身辺の世話をする侍 \*気色ある 合図をしてい  
る \*おどろきて 目を覚まして \*比興のこと おもしろいこと

## 【現代語訳】

一、(1) (2)を現代かなづかいになおしなさい。

(1) ( ) (2) ( )

二、(3)気色あるぞと心得てとあるが、江次郎は、僧正のどんな様子を誰ににど  
うしなさいという合図だと心得たのか。本文中の言葉を抜き出して、次の文の  
( )に書きなさい。

江次郎は、僧正の( ) 様子を

( ) という合図だと心得た。

三、(4)語りての主語を本文中の言葉で答えなさい。

( )